

第二章 伝 承

第一節 伝 説

伝説・民話

郷土を愛する心の泉として、今日まで語りつがれてきた伝説・民話の多くが忘れられて行く現状である。これらは勿論、事実性には乏しいが、郷土に生をうけた者にとつては、何か深く心をひかれるものがあり、郷土を育ててくれた多くの先人の生活や、世の中の様子を知らることができるといえる。

有名な話、珍しい話など多くのなかから一、二を書きとどめ、郷土を愛する心のふれあいの資料としたい。

○ 山姥物語

○ 汗かき地蔵

○ 小平治弘法

○ おちよぼ稲荷古里の宮

○ 小口神社の山柿

○ やろか水

○ 梶原宗安の太刀

○山姥物語

〈物語の大意〉

文明年間(西暦一四六九—一四八六)に、丹羽郡羽黒村(現犬山市)の鳴海高橋の地に、福富新蔵国平とよぶ郷士が住んでいた。この人は近在にきこえた武芸の達人であつて、つねに狩猟を好み山野にはいつていた。

たまたま仲秋の月を眺めながら、夜、羽黒川をのぼり本宮山で狩をし、本宮山頂の祠前にさしかかつた時、あやしい気配を感じて拝殿のあたりに目をむけると、身の丈三メートル余りもあろうか、異様な身なりをした大女が髪を乱して新蔵をジツとにらんでいた。

「さては、うわさにきく山姥ならん」と、弓に矢をつがえ射放つた。たしかな手ごたえがあつたと思うやいなや不思議にも、社殿の灯明がふつと消え、にわかには本宮山が鳴動しはじめ、雲やきりが立ちこめ新蔵をつつんでしまった。

新蔵は心のはやるのをおさえ神仏に祈つて、暗れるのを静かに待った。やがてあたりが明るくなったので、社殿に近づいてみると、あたり一面、黒血がしたたり落ちていた。

これをたどつて進むと、この血は大口余野の里の、やはり郷士で小池与八郎という者の門前までつづいていた。

郷士小池与八郎の妻が病のため床にふせていることを知っていた新蔵は、血の跡について妻の居間へ行き、そこで声をかけたが返事がない、不吉な予感がして部屋に入り、布団を引き払つて見ると、はたしてその姿はなく、あたり一面おびただしい血が流れていた。

そしてかたわらの窓の障子に血で、つぎのように和歌が書きつけられていた。

もとめなき契りのすえのあらわれて

ついにはかえる ふるさとの空

おもいあらばそれかとも見ん此の里の

小池の水のあらんかぎりは

余野の大龍山徳林寺は、山姥物語の古刹として有名で、山姥寺とも称され、山姥の化身小池与八郎の妻が、行方不明となり、その子が亡母を悼んでその亡霊菩提のために建立せられたのがはじまりといわれ、のち今の寺号に改めたと伝わる。

この伝説は、中世末期ごろよりこの地方に流布された怪異、変化仏教伝説が長い年月をへて総合されてできているものである。

種々の流布本が残っているが、全徳寺住職吉田静深氏の本宮山、おがせ池、山姥物語がこの集大成されたものとみてよいと思われる。

○長松寺の汗かき地藏さま

長松寺(大字大屋敷)のご本尊である鑄鉄地藏尊は、元禄七年(一六九四)伝東という高僧が、中島郡奥田村(現稻沢市内)で廃寺になっていた一寺をこの地に建立し、同時にその寺の本尊をむかえ祀ったものである。

この地藏さまは世の中に異変がある時や、信者が災難にあった時、必ず多くの汗をかかれると伝えられ、里人の話に、元禄八年正月のある日、お地藏さまが汗をたくさんかかれたので不思議がっていたところ、この年はこの地方が水不足に見舞われ、農作物は大凶作で村人はこまり、お地藏さまに願かけ詣りをしたところ、雨が降り水不足も解消したといわれている。

今日でも信仰する人が多く祭礼の日には、かなり遠くの地からも参詣にくる人がある。
この鑄鉄地藏尊は、県の文化財に指定されている。

○長松寺の小平治弘法さま（目たたき弘法）

境内に「小平治弘法」が祀られている。この弘法さまにまつわる話。

大屋敷本郷に住んでいた野田小平治は元来、大工で酒、ばくちにおぼれ近所の人々にかなり嫌われていたが、ある年村の小川にかかった木橋が長雨で流され村人が大へん難儀をしていた折、庄屋にいち早く橋の修理を申し込んだが相手にされず、これに腹を立てた小平治は村中の橋を石橋にしようとした。各地の霊場めぐり多くの喜捨をうけ、この浄財をもとに一一か所の木橋を石橋にかえ村人を喜ばせた。それ以来、小平治は村人の尊敬するところとなり、

明治三三年、惜しまれつつ他界したという。昭和二年村人は、小平治の遺徳を偲び碑を建立した。この建立にまつわる話に、建立の日、碑の上部に刻まれた弘法大師像の左眼が失明したかの如く見えた。これは小平治が生前、左眼失明しており彼の霊がこのようにしたのであろうと多くの参拝者は語り、その後だれいともなく「目たたき弘法」ともよび近郷にその名は広まり、信者が多くなつた。



図4-17 小平治弘法さま(長松寺境内)

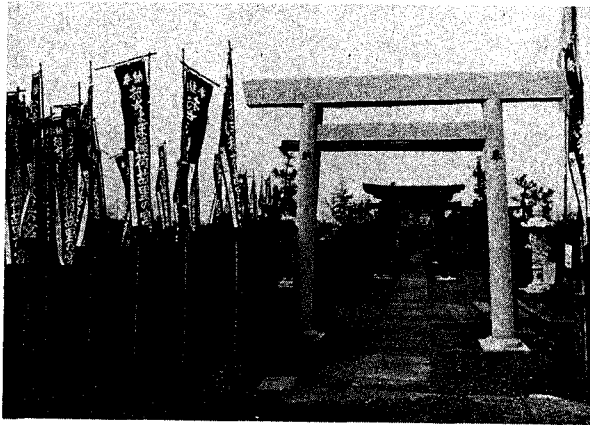


図4-18 おちよぼ故里の宮(二ツ屋地内)

○おちよぼふる里の宮(二ツ屋地内)

今日多くの信者をあつめ近郷の稲荷信仰の地として、その名が広く知られている岐阜県羽島にある「お千代保稲荷」は昔、本町の二ツ屋地内にすんでいたキツネがたびたび村人を苦しめたため、ある山伏の調伏によつてこの地に住むことができなくなり、現在の地に移りすみ、のち自分の行いを改め、この地の人々のためにつくしたので死後、

神として祀られ今日に至つたということである。近年このキツネが、ある村人(修行者の御座にでて、「ふる里がなつかしい」と語つたとかで、部落民が集まり相談して、二ツ屋地内に昭和三九年一〇月「おちよぼ故里の宮」を祀つた。

今日では境内も立派に整備され、その信仰の厚さがうかがわれる。古記録によると、二ツ屋部落の北、「字西狭間」の地に明治の初期まで塚があり、これを「オチヨボ塚」とよんでいたが道路修理の折、とりこわされたとあり、この塚にすんでいたのが前出の「オチヨボキツネ」であつたと伝えられている。

○小口神社境内の山柿

中小口部落の氏神、大久地城址(小口城址)の西に鎮座する小口神社境内に繁茂する山柿の大樹は「子授け・智恵授け」の神木として往古より崇敬の祖とされ、子供に恵まれない多くの人々が人目をさけ、この山柿

の大樹にふれ、願いをかけ、「^{まき}誕び」を待ったといわれている。

この山柿は、しだれ柿の種類で、大風にも小枝一本折れたことのない不思議な木で、幾百年の昔からの長寿を表わし、今日も変りなく若さを保っている。

○ヤロカ水

この伝説はおもに木曾川筋の地域に伝わるもので、町内でも木曾川の氾濫にまつわる話として、昔から広く伝えられている。

往昔、その年の夏、雨が幾日も降りつづき、木曾川が増水し堤防が危険になり、日々村人が総出で見守り、水防にあたっていた。折しも激しい雨音と濁流の音にまじって、どこからか、「ヤロウカ、ヤロウカ」という声がきこえてくる。怒った村人の一人が、「ヨコサバヨコセ」ときけんだ。

すると不思議にも、にわかには水量が一段と増え、大水は必死の水防にもかかわらず、堤防をこえ川筋の村々に流れ込み、田畑はいうにおよばず、人も家も家もあつという間に水の底に消えたという。

村誌には大屋敷地内(現在の白金の地)に十蓮寺という寺があったが、この寺は「ヤロカ水」によって流れてしまつたとするされ、このほかにも町内では木曾川の氾濫のたびに多くの被害をうけたと伝えられている。

○梶原宗安の太刀

梶原源太景季の子孫が今からおよそ五五〇年ばかり前、近郷の羽黒村へ故あつて来た。この時従つてきた家来が七人ありこれを後世七名字といい、この一族の末の福富新藏は山姥物語の中心人物であると伝わっている。

羽黒村の椿にその頃居を構えていた福富某が貧乏で生活に困り、持っていた刀を河北村の仙田清六に質入れをした。

まもなく清六が死亡したためこの刀は、仙田七左工門の手に移ったといわれる。

また一方でこの梶原宗安の太刀はその昔、外坪とらの服部清五郎という人がもち、しだいに家が貧しくなり、河北の仙田屋へ入ったとも伝わっている。

現在、外坪地内にある墓には梶原宗安之塔・惟時寛保二壬戌歳九月□□と刻んだ石塔がある。

第二節 方言と言い習わし

方言

人々の生活の中から生まれ、その土地個有の親しみをもつ「方言」は、本町にも多くあるが、これは尾張北部地域共通のもので、「訛り」をもったことばが日常の会話の中で使用されてきた。

しかし今日では経済・文化・教育の発達、拡大により、地域の交流が激しく、人々の生活も大きく変化し、方言はしだいに減少し、おのずと標準語が多く使用されるようになった。

しかしこうしたなかでも、相変らず老人の会話のうちには、昔ながらの方言が多くでる、中でも古来より農耕を中心とした生活の中で生まれ、そして使用されたと思われる方言が多くあるのは当然である。

「きんにようのようさり、たん和白いものが降つたなも」

(昨日の夜、 沢山雪が降りましたねー)

「ぶん、ほんだけんど、けさがたはあだにぬくて(とい)えなも」

(はい、けれど今朝は割合いに暖かいですねー)

以下、町の人々の会話の中から今日語りつがれている方言をもとに、多くの文献と照合しながらおもなものを列記するとつぎのようである。

方 言	標 準 語	方 言	標 準 語
<p>ア アカン アジナイ アヌク アダニ アツチベタ アラスカ アンビヤ アホラシイ イッチョウウロー イワシタ・イヤアータ イシナ・イシコロ イッセキ イノク・イゴク イキル</p>	<p>駄目だ・いけない 味無い 上を向く 割合いに・ずいぶん あちら側 ……あるものか 具合い・加減 馬鹿らしい 一番上等 言われました 石 一生懸命 動く 蒸し暑い</p>	<p>エ ウ オ イレエロキヤアール イボレ ウセル ウザル ウデル エエロカケン・エエロハチベ エエネル エエ エドクル オル オンギヤア オトラカス オージョウコク オゼエー</p>	<p>色々と 溝 来る 叱る 茹でる 適当・よい程度 背負う 良い・善い 彩色する 居ます 恐しい 落とす 困り果てる 悪い・劣る</p>